

「胃癌の構造」第2版

筑波大学教授 中 村 恭 一 著

大阪府立成人病センター部長

谷 口 春 生

名著「胃癌の構造」第2版が刊行された。一昔前、胃癌の組織発生について、“未分化型癌”は胃固有粘膜から、“分化型癌”は腸上皮化生粘膜から発生するという中村博士の大胆な仮説が病理学会において発表された。評者も次演者席で拝聴していた。故滝沢延次郎教授から、少し無理な説ではなかろうかと発言されたことが想起される。「胃癌の構造」初版が上梓されてから既に8年、その間、著者自身の業績はもとより、病理形態学者を含め、胃癌診療に携わる多くの人達の研究、特に時系列を加味した症例の積み重ねによりその仮説が実証され、現在では学説として絶大な支持を得ている。胃癌研究会においても、中村分類を胃癌組織の2大別分類の便に供することが検討されている。

従来から病理形態学者は組織切片上に見られる形態変化を平面的のみに把握する嫌いがある。「胃癌の構造」初版に際しても評したことがあるが、癌研病理の時代から中村博士

は、外科的切除材料を余すところなく切り出して組織標本に作製する、という大変な努力を重ねて病変を立体的・三次元的に解析、更に微小胃癌から進行胃癌に至る時間の経過や、時間の経過に伴う胃底腺退縮などを踏まえた四次元的考察を加え、説得力に満ちた「胃癌の構造論」が展開されている。そこには中村教授の主張と哲学が脈々と流れ、第2版に受け継がれている。

従前から中村教授は linitis plastica 型癌の組織発生とその特有の形態をとるに至る発育過程について精力的な解析を試みているが、今回出版された「胃癌の構造」第2版では、新たにその項を設けて幾つかの実例と数多くのデータを用い、説得力の強い記述が加えられている。また、われわれが悪性/良性の判定という重要な立場にあって、さして気にも留めずに用いている“異型性が強い/弱い”“発育速度が速い/遅い”といった主観的・あいまいな表現に対し、異型度指数、あるいは癌

の発育速度を規定する指数を導き出し、それを用いてこれらの事象を客観化することの有用性を説き、その実際についての詳細な記載がなされている。

一方、外科病理医、あるいは臨床医家にとっても、多数の X 線写真とマクロの写真、それに種々な組織型についての顕微鏡写真が対比して配列され、所見の読みや病理学的な考え方が論理的に記述されている。臨床データの理解や、組織分類の参考に座右に置くことをお勧めしたい。

本書を通読して感じられることは、著者が常に事実に対しては謙虚であり、推論に対しては極めて厳しい姿勢を貫いていることである。今日の医学、殊に腫瘍病理学の目は、顕微鏡的ミクロの世界から遺伝子をめぐる超々ミクロの世界に向けられているが、本書によって、まさに学問はかくあるべしと教えられ、形態学での物の見方、考え方、研究の方策の立て方、結論の導き方が示されている。

著者の言葉を借りるならば、1人でも多くの読者が、「胃癌の構造」という新種の苗木を、しっかりとした“前提”によって耕された豊饒な大地に移植し、それらが数多くの大樹に育つことを祈る。

B5判 350頁 図96 写真207
カラー写真14 1990 定価15,450
円(税込) 〒300